

はじめに

私は恵まれていてと思う。

スティーブン・R・コヴィー

夜のニュースは暗い事件に埋め尽くされ、落胆の言葉が繰り返される中、私は恵まれていてと思う。この世の中もまんざら捨てたものではないと思えるような、そんな生き方をしている世界中の人たちに毎日会えるからだ。

企業の不祥事や非倫理的行為をいやというほど聞かされる日でも、私は恵まれていてと思う。誠実で不屈な道徳精神を備えた国家リーダー、企業の経営者やビジネス・リーダーたちと触れ合えるからだ。

犯罪、戦争、自然災害、病気が後を絶たない時代にあつて、私は恵まれていてと思う。多大な犠牲を払ってまで高潔な意図の実現に努力している法の執行人や軍事専門家、行政担当者、医療関係者たちと仕事をともにできるからだ。

親子や家族の関係がかつてないほどの危機に瀕している時代にあつて、私は恵まれていてと思う。子どもを養い育てるべく日夜額に汗して働く逞しい父親や立派な母親たちを知っているからだ。

Copyright © 2006 by FranklinCovey Co.
and The Reader's Digest Association, Inc.

All rights reserved. No portion of this book may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means—electronic, mechanical, photocopy, recording, or any other—except for brief quotations in printed reviews, without the prior permission of the publisher.

Published by Rutledge Hill Press, a Division of Thomas Nelson, Inc.,
P.O. Box 141000, Nashville, Tennessee 37214.

学校や若者たちが拒絶とデリケートな社会的ジレンマに苛まれている今日、私は恵まれていると思う。豊かな品性を備え、独自の方法で結果を出そうと意気込む献身的な教師や才能溢れる若者を知っているからだ。

どこまでも善良で、世の中に大きな貢献をしているさまざまな分野、世界のあらゆる地域の人々に巡り会い、私は本当に恵まれていると思う。彼らが私を鼓舞してくれるのだ。きっとあなたも、そのようなタイプの人ではないだろうか。

現代を生き抜くためのバイブル

そう、この世の中の大多数の人は善良な人間であり、彼らの堅実な声がそうでない一部の者たちの騒音によってかき消されることがあってはならない。

その一方で、私たちの多くは善行を心がけ、自分で思う以上の評価を受けてしかるべきであろうが、自分がやれることはまだあることも知っている。だから冷静になって考えると、もっと有意義な人生を送れるのでは、自分ももっと他人に尽くせるのでは、という思いを抱くのだ。あなたもそうではないだろうか。

私は自分の最も重要な仕事は過去ではなく、これから先に待っていると信じて生きたいと思っている。だから、私は新しい分野に挑戦し、結果を出すための有意義な生き方を追求する気持ちを忘れたことはない。そして、充実した人生を願う一人の人間として、本書のような書物が読まれ、考えるヒントとなることはとても価値あることだと思う。本書は、『リーダーズ・ダイジェスト』（アメリカで一九二二年に創刊された月刊ファミリー雑誌で、政治、ビジネス、健康、教育など幅広い話題を扱う）によって集められた

何十年にも及ぶ著名な「成功」物語や、世界的に尊敬されている人たちの言葉を収録したものである。有意義な生き方を実現する時代を越えた原則や実践的ヒントが散りばめられた、まさに現代を生き抜くためのバイブルであると自負している。

私は、本書が少なくとも三つの点であなたのお役に立つことができると思っている。まずは、ゆったりとした気分で読書に耽^{かか}る楽しさを味わっていただきたい。そして、現実を直視してほしい。生きるということはなま易いものではない。今はまさに混乱の時代であり、どの予測を見ても混乱の度合いは増すばかりだ。最近私たちの目や耳に触れるものは、不安をかき立てたり、苛立ちを誘ったりするものが何と多いことか。そうした状況下、読書に浸たって気持ちを奮い立たせる機会はますます貴重と言える。嵐から身を守る避難所として、あなたにとって希望に満ちた安息のひと時となれば幸いである。

二つ目として、あなた自身がもう少し人生を楽しむとともに、もう少し結果を出すにはどうしたらよいか、そのヒントを本書から見つけてほしい。『リーダーズ・ダイジェスト』は八〇年以上の長きにわたり、意義ある生き方をするための知恵を提供してきた。幸いにして、何百もの実に感動的な体験や教訓をこの一冊に詰め込むことができた。今現在、そして将来にわたって、ただ努力するだけでなく、最善を尽くすためのヒントをどこかで発見していただけたら、と心から願う。

さらにもう一つ、本書が、「流れを変える人」であろうとするあなたの内なる炎をいっそう燃え上がらせるきっかけとなることを希望する。流れを変える人とは、家庭や職場、地域社会などにおいて世代間、あるいは場面間で伝えられてきた悪しき伝統や有害な慣行、つまりは悪い流れを断ち切る人のことだ。彼らは自分の願望にとどまらず、人間性の最も深い、最も気高い衝動をうまく利用する。不安な時代にあつて

は、裁きを下すよりも人々を導く光となり、批判をするよりも自ら範を示す。不和の時代にあつては、被害者に甘んじるのではなく変革の触媒となり、病を引き起こすのではなく治療するのだ。今日の世界は、流れを変える人をもっと多く必要としている。あなたも、最高の「流れを変える人」になれるという自信を持つてほしい。そして、自分の影響力が増していくのを見守ってほしい。

日常にある偉大さ

世の中には時折、偉業を成し遂げる英雄や稀有な才能を持つ天才が出現する。科学者による大発見や、技術者による革命的装置の発明もある。一〇年位に一度、政治家同士による歴史的な和平提案が調印されることもある。また毎年、最も優れた実績を残した俳優、ミュージシャン、スポーツ選手、ビジネスパーソンなどを選ぶ派手なイベントが開催されたり、町内の祭りでトウガラシの大食いやのど自慢を競ったりもする。

こうした並外れた出来事や偉業はメディアによって熱く報じられ、その「偉大さ」がはやし立てられる。そして、それらは大概、注目と拍手喝采に値する、ある種の偉大さであることは間違いない。なぜなら、それらは世の中に重要な進歩をもたらすからだ（もつとも、人生になくはならない趣やユーモアを添えるだけのものの中にはあるが）。

だが大抵の人は、もつと控えめで新聞の見出しにはなり得ない、もう一つ別の種類の偉大さが存在することを知っている。そして私は、それこそが、より大きな名誉、より多くの尊敬に値する偉大さであると考えている。私はこれを「日常にある偉大さ」と呼んでいる。

日常にある偉大さは、私が以前用いたことがある「第一の偉大さ」と同義である。これは特徴や貢献において、評判、富、名声、地位などを含む「第二の偉大さ」とは区別される。日常にある偉大さは一つの生き方であつて、単発的な事象ではない。人の財産よりも人となりを示すものであり、名刺に書かれた肩書きよりも顔から発散される高潔さとして表わされる。人の才能よりも動機、仰々しい偉業よりもささやかで単純な行為を意味する。要するに、つましいものなのだ。

日常にある偉大さとは何かと尋ねると、自分の知っている人間について答える人が多い。例えば、来る年も来る年も世間の風雪に耐え抜きながら家族を養い、隣人を助ける農夫。自分は完ぺきでないことを知りつつ、毎日必死に頑張つて手のかかる子どもにも無条件の愛情を示す母親。さらには、正直でよく働き、他人を敬う気持ちを忘れず、いつも頼りになる祖父母、教師、職場の同僚、隣人、友人など。特に、自分が真似できる程度の人を持ち出す。第二のガンジーやエイブラハム・リンカーン、マザー・テレサにはなれなくとも日常にある偉大さは発揮できることに気づいているからだ。

そう、日常にある偉大さとは何かと問われて彼らが持ち出す人というのは、この章の冒頭で私が述べたのと同じタイプの人たち——世間の否定的な雑音は気にせず建設的な貢献をしようと己を磨き、自分の務めを果たす術を何とかして見つけようとしている人たちなのだ。要は、それこそが彼らの普段の人となりなのである。

日々の三つの選択

では、日常にある偉大さを生み出すのは何だろう。何がその根底にあるのか。その答えは、日々の三つ

の選択、つまり意識するか否かに関わらず、私たち一人ひとりが毎日の生活の中で行なう選択にあると私は確信している。

第一の選択——行動を選ぶ

私たちが毎日行なう選択の一つ目は、積極的な生き方をするか、それとも流された生き方をするかだ。

言うまでもないが、私たちは自分に起きることすべてをコントロールできるわけではない。人生は大海の波のように、さまざまな出来事が次から次へと押し寄せて来る。その中には私たちがほとんど、あるいはまったく影響を受けない偶発的なものもあれば、こてんぱんに叩きのめされてしまうものもある。それでも私たちは、その日の潮の干満や流れに身を任せて漂う流木となるか、それとも自分の行動や行く先の決定に主体的な責任を果たすか日々選択している。

この選択は簡単そうに見えるかもしれない。積極的な生き方より受身的な生き方を好む人などいないからだ。だが結局のところ、最終的な答えは私たちの行動によってのみ示されるのだ。自分の人生は自分で決めたいと言いながら、いつ何をするか決定することなく、テレビの前で夜の時間を過ごしてしまう人が何と多いことか。また、仕事に関して大きな夢や高い目標を持っていると言いつつ、スキル開発の責任を雇い主に委ねてしまっている人もいる。さらには、堅実な価値観を大事にしたいと言いながら、ちよつとでも反対されようものなら誠実さなど吹っ飛んでしまう人もいる。つまり、積極的な生き方をしたいと口

では言っても、結局は無為な人生を送っているようにしか見えない人が実に多いのだ。

それに対し、本書に登場するストーリーはいずれも、行動を選択する人たちの話だ。自分に起きることは必ずしも選べないが、それにどう対処するかは自分で決められることに気づいている人たちなのだ。その中には著名人も一部いるが、大半は一般の人たちである。英雄的な選択をする人もいるが、ほとんどはそうではない。公の場での選択もあるが、その多くは個人的なものだ。普通の人が個人的な形で普通の選択をしているのだ。彼らの人生と、彼らが行なった選択については是非考えてみていただきたい。私が気づいたのと同じテーマにあなたも気づくだろうか。有意義な生き方をしようとする人、精一杯の結果を残そうとする人とは、行動を選択する人だということに。

私たちは自分の人生、自分の未来を自ら創造すべきであり、それは可能なのだ。

第二の選択——目的を選ぶ

ただし、せっかく行動を選択したのに失敗に終わるということはよくある。自分自身や他人にとって価値がなく、時には害さえもたらさような場合だ。ただ行動すると決めさえすればよいというわけではないのである。

そこで、私たちが毎日行なう二つ目の選択は、どのような結果、あるいは目的のために行動するか、ということだ。

人は誰もが、自分は価値のある人間であり、自分の人生は意義があると思う。ただ忙しいだけの人生ではなく、有意義な目的を追求することに忙しくありたい、と願っているが、今日の何ともせわしない世の中では、自分が目指している目的について考えずに毎日を過ごしがちだ。ましてや、自分が最も力を入れたい目的について腰を据えて考えることなどまずない。その結果、あちこち忙しそうに飛び回っていても、結局は何の成果も得られない人が実に多いのだ。

しかし、この後登場する人たちは違う。ジョン・ベイカー、マヤ・アンジェロウ、リユーバ・ガーク、ジョー・パターノの他、車椅子の製作に情熱を燃やす人や障害を持つ子を全員で支える家族など、様々な人たちが時には大きなリスクや個人的犠牲も省みず、有意義で高潔な目的を積極的に選択しているのだ。

実は、本書に集められているストーリーはそもそも、目的の選択を行なった二人の間である『リーダーズ・ダイジェスト』創刊者の故デウィットおよびライラ・ウォレス夫妻に遡る。一九二二年、結婚して間もない二人は家計を賄うために雑誌の発行を始めた。ところが、夫妻は金を稼ぐという目的では満足せず、デウィットが子どもの頃に書き留めた目標の実現を目指すようになった。その目標とは、「どんな職業に就いても社会に奉仕できるような全力を尽くす」というものだった。体験談や逸話、ユーモア（それも溢れるばかりのユーモア）のある話、さらには勇氣、慈悲、誠実、資質、尊敬、団結など、自分たちが最も評価していた有意義な生き方をするための原則を奨励する実践的知恵を毎号に盛り込んだ。そうすることで、「人々の自助努力を側面から支える」ことを二人は一緒に選択したので。

二十一の言語で出版され、世界で最も広く読まれる雑誌となった『リーダーズ・ダイジェスト』は、そうした不変の原則の普及を通じて、全世界に広がる八千万人の読者から共通の反響を今なお得ている。

つまりウォレス夫妻は、すべてのページのページ、すべての号について目的のある生き方をしたのだ。本書に登場する人物も、一歩一歩、一日一日、価値ある目的を追い求める選択をした人たちである。彼らがどんな目的を追求したか知ることを通じて、あなた自身の人生を有意義で貢献に満ちたものにするには何をすべきか考えてほしい。

第三の選択 — 原則を選ぶ

ただし言うまでもないが、こうしたことは魔法や幸運によって起きるものではない。積極的思考の効果を私は否定しないが、あなたであれ私であれ、成功や不安の解消を願ってさえいれれば実現するとは思わない。時代を超越した普遍の原則に沿う生き方をしてはじめて、絶えず向上できる意味のある人生、つまりは日常にある偉大の生き方を手にすることができるのだ。

つまり、私たちが日々行なう三つの選択は、実証済みの原則に従った生き方をするか、それともそれを怠って後で苦労するか、である。

私の言わんとしていることを理解してもらうため、『リーダーズ・ダイジェスト』の一九八三年一二月号に掲載されたお気に入りの逸話を紹介しよう。笑い話として書かれたものであるが、原則の持つ力と、それが私たちの人生や選択にどう影響するかを如実に示していると思う。

海面に霧が深く立ち込めたある晩、一艘の戦艦の艦長が別の船の灯かりのようなものが接近してくるのに気づいた。艦長は、その船に灯火信号を送るよう通信係に命じた。「貴船の進路を南に一〇度変更されたし」という合図だった。

すると、「貴船の進路を北に一〇度変更されたし」という信号が返ってきた。

艦長は応答した。「こちらは本艦の艦長なり。貴船の進路を一〇度南に変更せよ」

「こちらは一等船員なり。貴船の進路を一〇度北に変更せよ」

この返答に激怒した艦長は、こう信号を送った。「こちらは戦艦なり。貴船こそ南に一〇度進路変更せよ！」

返信…「こちらは灯台なり。貴船こそ一〇度北に進路変更せよ！」(寄稿者…ダン・ベル)

軽いジョークではあるが、言わんとするところは明確だ。船の大きさも責任者の階級も関係なかった。灯台は進路を変えようがなかった。常に同じ場所に立っているのだ。進路変更の選択は艦長が行なうしかなかったわけである。

灯台は言うなれば原則である。原則は動かすことができない。永久的かつ普遍的であり、変わることはないのだ。年齢、人種、信条、性別、地位など関係なく、皆が等しくその支配を受ける。原則は灯台同様、嵐のときも穏やかなときも、明るかるうが暗かるうが、進路を決めるための不変の標識となるのだ。

アインシュタインやニュートンといった世界的偉人たちのお陰で、科学の領域ではそうした多くの原則、すなわち自然の法則が発見されてきた。例えばパイロットは、重力、揚力、推進力、抵抗力という飛行の四つの原則に支配される。農業を営む者もやはり、収穫の法則という原則をマスターしなければならぬ。体操選手やエンジニアは、反発力の法則などの物理法則の中で行動する。だが、こうした人々のいずれも、その原則を發明したわけではなく、それを変更することもできない。船を操る船長のように、原則に従って進路を決めるか、原則を無視して後でツケを払うかを選択するしかないのだ。なぜなら、価値観が行動を促し、原則が結果を支配するからである。

科学の場合と同様、人間的なことにおいても似たような灯台の原則が存在すると私は考えており、そのいくつかを本書に盛り込んでいる。ビジョン、革新性、謙虚さ、資質、共感、寛大さ、忍耐、バランスなどだ。これらの原則はいずれも、個人の能力を高め、満足のゆく生き方へと私たちを導くことができる。信じられないと言う方は、ビジョンの欠如、怠惰、虚栄心、だらしなさ、偏狭、復讐、決断力のなさ、アンバランスなど、逆の生き方について考えてみるとよい。成功の要因はまず見当たらないだろう。

本書で取り上げたストーリーのいくつかは、何一〇年も前に書かれたものである。にもかかわらず、いずれも原則に基づいているという事実こそがそれらを永久的かつタイムリーな存在にしているのであり、現在のみならず二〇年後でも通用するはずだ。したがって、本書に登場する人物たちのストーリーを読み、その洞察に触れる際、時代や名前あまり気にしないでほしい。それよりも原則と、それを彼らが人生にどう応用したかという点に注目してほしい。さらにもっと重要なのは、日常にある偉大さへの到達を目指すあなた自身の旅において、進路を決め、進んだ距離を測定し、コースの調整を行なうための標識として灯台の原則を自らフル活用するにはどうしたらよいか考えることだ。

あなたの場合はどうか

要するに、あなたが成すべき選択は三つあり、それらが日常にある偉大さの基礎となるのだ。行動を選ぶということは、ある意味で私たちが生きていく過程で発揮する活力、すなわち意志力に他ならない。目的を選ぶということは、私たちの目的地、人生で何を目指すか、どんなことを達成したいかである。そうすると原則を選ぶのは、そこに至るための手段、ゴールに至るまでの道筋を決めることになる。

この章の冒頭で列挙した人々、すなわち今日の世界で日常にある偉大さを実践している人たちは、これら三つの選択の仕方が卓越していると私は考える。また、この後登場する人物たちも、同じ三つの選択に積極的に対応することで人生のいろいろな時点において異彩を放っていると言えるだろう。

ただし、本書のねらいはそうした人たちにあるのではない。あなたが主役なのだ。つまり、他の人たちの経験や発言に触れることにより、あなた自身の人生について考えるきっかけにしてもらいたいのである。あなたは日々どのような貢献をしているか。他人にどう接しているか。時間をどのように使っているか。ただ努力しているだけか、それとも最善を尽しているか。

そういう意味で、あなたに次のような質問をしたい。

●あなたは流木のようにあてもなく漂うような生き方をしているか、それとも自ら波を立て、自分で選択を行って望む方向に進んでいるだろうか。

●あなたの日々の選択はどんな結果、どんな目的へと通じているか。どんな結果、どんな目的へと

至るようにしたいだろうか。

●あなたの生き方は永久的かつ普遍的な原則に沿っているだろうか。

どれも簡単には答えられないだろう。明確な答えを思いつかない場合や、浮かんだ答えが気に入らないときは、本書をぜひ活用してほしいと思う。それぞれのストーリーをじっくり味わうことで、自分の生き方は有意義であり、周囲で何が起きていようと、日々向上し、意味のある人生を送ることは可能だということに気づいてもらえると思うからだ。

この後のストーリーは七つに大別され、各カテゴリーが原則を三つずつ含んでいる。合計二一の原則のそれぞれについて、それを例証するストーリーがいくつもあり、その後にその裏付けとなる引用やエピソードを付けた。さらに、解説と今日への応用法を示す意味から、短いコメントとアドバイスを随所に記した。また、気楽な気分で読んでいただくため、どこから読み始めても役に立つようにしてある。最初の章から順番に読んでいなくても、十分理解していただけたらと思う。

本書はいろいろな利用法があると私は考えている。親や教師の立場にある方が、この本の中の考え方やストーリーを使って子どもたちを鼓舞することもできるだろう。専門の講演者やビジネスリーダーたちが話の種として利用することも考えられる。職場の同僚たちと原則について話し合い、さまざまな業務活動に応用するのもよいだろう。だが、何といたっても本書が最もその威力を発揮するのは、あなたのような個人の方々だと思う。特定の個人的問題についてヒントや解決策をこの本の中から見つけ出し、それを刺激として意識を拡大してほしい。だから、ぜひともあなたの良心の声に耳を傾けるようにしてほしい。適切

に應用すれば自分の目標到達に役立ちそうな引用や原則に注目していただきたい。さらに、日常にある偉大さを実践する能力を強化するにはどうしたらよいか、そのための現実的かつ前向きな計画を作成するための提案を「あとがき」に記したので、これについても考えてみてもらいたい。

謝辞

この章の締めくくりとして、本書の編集にご協力いただいた方々に謝意と敬意を表するとともに、激励の言葉を贈らせていただきたいと思う。

まず、創刊者であるウォレス夫妻から現体制に至るまでのリーダーズ・ダイジェスト社に敬意を表したい。本書に収録したストーリーはすべて、同社によってすでに発表されたものである。各ストーリーが彼らに対して敬意を示すものであり、彼らが追求している目的なのだ。今日の現実の中で適切性を失うことなく、影響力を維持し続けてきたことを、私は大いに称賛するものである。

また、今回の編集全般にわたってご尽力いただいたデビッド・K・ハッチ氏にお礼を申し上げたい。そもそもこのプロジェクトを立ち上げてくれたのは彼だった。彼はもともと、リーダーシップ・コンサルタントとしての仕事で使用するストーリーや引用を集めていた。だが、資料の整理を進めるにつれ、これはもつと多くの人たちと共有すべきだという思いが強まっていった。千号を上回る『リーダーズ・ダイジェスト』の中から丹念に選び抜いた彼の眼力は稀有な存在であり、本書が読者の方々の人生にもたらし得る意義を見抜いた彼の先見性もまた然りである。

さらに、本書の中で紹介した大勢の著作家や哲学者、勇気ある一般の人々——その多くを私は存じ上げ、個人的に尊敬している——から途方もなく多くの知恵を提供していただいたことに感謝したい。それぞれが独自の方法でひらめいたものなのだ。彼らも私たちと同様、決して完璧ではないが、高潔な行為を熱望した人たちであり、私たちも何かを成し遂げられるのだという自信を持たせてくれる。

最後に、個性豊かな一人の人間としてのあなたに敬意を表する。あなたもこの章の冒頭で列挙した人々——混乱が声高に叫ばれる時代にあつて、素晴らしい生き方をすでに実践している人たち——の一人である。私は信じる。あなたは、他の人にはない経験と才能を備えている。それらを信じるのだ。それを活用して、本書の中の多くの知恵をさらに向上させていってほしい。そして、何よりも三つの選択を行なわなければならぬ——積極的な生き方をする。勇気が湧いてくるような有意義な目的を見つけること。そして、永久的かつ普遍的な原則に従って生きること。そうすることで、あなたはいつそう大きな喜びや心の安らぎを手にとるとともに、日常にある偉大さの生き方によって自尊心をさらに強化できるはずである。